広島女学院大学論集　第六十七集　一－二〇　二〇二〇年二月

角筆文献資料から安芸・備後地方の近世方言を探る

――広島県立文書館蔵の角筆文献調査（二〇一四年－二〇一六年）――

柚木　靖史

はじめに

広島県立文書館[1]（以下、文書館と記す。）での角筆文献[2]調査は、二〇一三年度の調査以来、大学学部の授業の一環として行った。本稿は、二〇一三年・二〇一四年・二〇一五年度の調査をもとに、近世の安芸・備後地方の言葉の特色について考察したものである。[3]

文書館での角筆文献調査は、日本語フィールドワークⅡ（郷土資料調査）[4]の実地演習として行っている。学外での実地調査で、直接に郷土の古文献に手を触れ、解読するという経験をとおして、郷土の文献文化財の価値を知り、その保存の大切さを理解してもらうことが目的である。

調査の主な内容は、角筆文献を見つけ、角筆の書き入れを解読し、その解読例をもとに、近世の安芸・備後地方の言葉の特色について考えることである。具体的には、年度ごとに調査対象とする各家の近世の漢籍を、文書館研究員の方に選定していただき、授業の受講学生と授業担当者である本稿の筆者により、全ての文献に目をとおし、角筆の書き入れが有るかないかについて確認し、角筆の書き入れの認められた文献については、その書肆的事項を調べ、角筆文献の目録を作成する。発見した角筆文献については、判読することが可能な限り、角筆の書き入れ内容を読み解く。まずは、発見者が読み得る限りの角筆の書き入れを読み、その後、本稿の筆者が、一つ一つの例を細かく追って確認した。

角筆は、墨を使わないことから、文献を一見しただけでは、目につきにくい。したがって、角筆を発見し、それを研究へと結び付けていくためには、大学の学生のころから、専門の授業による技能の習得が必要である。また、古文書を扱うことのある学芸員や司書にとっても、角筆に関する知識は有用である。

角筆は一見しただけでは白紙の状態であり、解読することは簡単ではない。そのため、私的な書き入れに使われたといわれており、角筆の書き入れには、改まった墨の文字の書き入れとは異なり、当時の口頭語が反映されやすい。したがって、方言史料として、有効であるといわれている。広島の郷土資料に書き入れられた角筆を丁寧に調べることによって、近世の安芸・備後地方の口頭語（方言）の実態が明らかになることが期待される。過去の方言の実態を文献により解明することは、墨で書かれた資料だけでは、難しいことである。文章語にとらわれない、私的な書き入れが記された角筆文献は、方言の歴史を知る重要な資料となる。したがって、まずは、近世の郷土の文献を多く所蔵する文書館に、どれくらいの量の角筆文献が存在するか、その全体数を調べ、一点一点の角筆文献を精読していくことにより、まだ、実態について不明なところが多い、近世の安芸・備後地方の言葉の特色について明らかにする必要がある。その意味で、本稿は、角筆調査の途中段階ということになるが、三年間の角筆調査で、角筆文献の発見数も多くなってきたので、その途中報告を提示し、大方のご批正を仰ぎたいと思う。

一　二〇一三年度から二〇一五年度にかけての調査で見つかった角筆文献

さて、文書館での、二〇一三年度から二〇一五年度にかけての角筆調査で、計四十九点の角筆文献が見つかった。まず、これらの角筆文献の書肆的事項をまとめて示す。

【二〇一三年度角筆文献調査より】

〈安芸国広島浅野家家中桑原家文書〉（整理番号　199304）[5]

（1）　評苑改正文選旁訓大全　一冊　（文献番号　3）

江戸時代後期板　袋綴装　縦26・7糎　横18・5糎

青表紙　朱書書き入れあり

（後表紙見返・墨書）此本何方江相借し申侯共／早速私方御戻し可被下侯

已上　桑原喜太郎本也／辛巳孟冬吉辰

（2）　論語　巻六　朱嘉集註　一冊　（文献番号　7）

江戸時代中期板　袋綴装　縦26・0糎　横18・8糎

青表紙　表紙破損　墨書書き入れあり

（表紙見返・墨書）上　桑原吉郎二

（巻末・墨書）上ノ桑原喜太郎

（3）論語　巻二　朱嘉集註　一冊（文献番号　11）

江戸時代中期板　袋綴装　縦26・5糎　横18・5糎

茶表紙　墨書書き入れあり

（表紙裏・墨書）桑原吉郎二／西宮竹山鶴斎／桑原蔵書

（後表紙裏・墨書）藝州廣島／水主町／上ノ桑原氏／三月八日求之也／鶴斎物／上ノ桑原

（巻末・墨書）桑原喜太郎

（4）論語　朱嘉集註　一冊（文献番号　18）

江戸時代後期板　袋綴装　縦26・0糎　横17・8糎

青表紙　墨書書き入れあり

（表紙見返・墨書）奥崎氏

（後表紙見返・墨書）嘉永二酉年

（5）孟子　巻一・巻二　一冊（文献番号　33）

江戸時代後期板　袋綴装　縦26・0糎　横18・3糎

青表紙　墨書き入れあり

（題簽）安永校正　孟子　道春点

（6）論語　一冊　朱嘉集註（文献番号　34）

江戸時代中期板　袋綴装　縦25・9糎　横19・0糎

青表紙　朱書書き入れあり

（表紙裏・墨書）上ノ桑原氏　上ノ桑原吉郎二

（巻末・墨書）上ノ桑原氏

（後表紙・墨書）桑原氏　天七地五　此本故有　水主町桑原氏

（7）小学　校本　外篇　一冊（文献番号　35）

江戸時代後期版　袋綴装　茶表紙　墨書書き入れあり

（表紙見返・墨書）染唐晋漢冉

（刊記）書林／河内屋藤四郎／須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／須原屋新兵衛／英大助／須原屋伊八／岡田屋嘉七／紙屋徳八／河内屋茂兵衛／河内屋藤兵衛

〈備後国芦田郡府中市村延藤家文書〉[6]（文献群番号　199110）

（8）孟子集註　再刻　四冊（文献番号　2853～2856）

江戸時代後期板　縦22・3糎　横15・6糎　茶色表紙

墨書書き入れなし「西備府延藤氏蔵書記」朱印あり

（刊記）発行書肆／須原屋茂兵衛／須原屋伊八／須原屋新兵衛／山城屋佐兵衛／岡田屋嘉七／岡村庄助／和泉屋庄治郎／和泉屋金右衛門／和泉屋吉兵衛／河内屋太助／板

（9）重訂小学纂註　内篇　二冊　外篇　一冊（文献番号　2817～1819）

江戸時代文政五年（一八二二）板　縦23・0糎　横15・5糎　青表紙　墨書書き入れなし「古府黌印」朱印あり

（後表紙見返・墨書）廣島縣第三回優等試験第壱等賞品
（貞　表紙見返）文政五年壬午夏／清本翻刻／重訂小学纂註／福山藩　歳寒堂蔵板
（外篇・刊記）福山藩歳寒堂蔵板　江戸発行書舗　鶴屋金助／岡村庄助／英平吉

【二〇一四年度調査より】

〈安芸国加茂郡寺家村野坂家文書〉[7]（文献群番号　１９８８０２）
（１０）改正音訓　書経　一冊　５０６（８８０２）
江戸時代後期板　縦２５・５糎×横１８・０　袋綴装　茶表紙　墨書書き入れあり
（１１）新刻改正　孟子　後藤点　四冊　７（８８０２）
江戸時代後期板　縦２７・０糎×横１８・０　袋綴装　茶表紙　墨書書き入れなし　「児玉蔵書」印あり
（後表紙見返し・墨書）明治五年壬申孟春求之／安芸山県郡穴卯／児玉俊造光／蔵本／四書全部十冊／浪花安堂町秋田屋／太右衛よる買
（刊記）佐土原学習館蔵板／大坂製本書／南久太郎町壱丁目相屋九兵衛
（１２）書集伝　上　再刻後藤点　一冊　５０５（８８０２）
江戸時代後期板　縦２５・０糎×横１８・０　袋綴装　茶表紙　墨書書き入れなし　「橋格」印あり
（１３）新刻改正　論語　後藤点　四冊　８（８８０２）
江戸時代後期板　縦２７・０糎×横１８・０　袋綴装　茶表紙　墨書書き入れなし
（１４）新刻改正　中庸　後藤点　一冊
江戸時代後期板　縦２５・０糎×横１７・５　袋綴装　茶表紙　墨書書き入れなし
（１５）孟子　校正道春点　四冊　５５５（８８０２）
江戸時代天保九年（一八三八）板　縦２５・５糎×横１８・０　袋綴装　青表紙　墨書書き入れなし
（表紙見返し・書き入れ）菅井廣太郎勝忠　什物
（後表紙見返し・書き入れ）長谷川
（刊記）宝暦四年甲戌仲春　開版
文政九年丙戌初夏　再刻
天保九年戊戌季夏　三刻
書誌／須原屋茂兵衛／秋田屋太右衛門

〈呉焼山押込富永家文書〉[8]（文献群番号　１９８８２１）
（１６）孟子　一冊　（１８９）
江戸時代中期板　縦２５・３糎×横１８・０　袋綴装　茶表紙　墨書書き入れあり

（版心記）山崎嘉点

（１７）孟子　一冊　（１９０）

江戸時代中期板　縦２５・３糎×横１８・０　袋綴装　茶表紙　墨書書き入れあり

（１８）孟子集註　一冊　１９１

江戸時代中期板　縦２５・３糎×横１８・０　袋綴装　茶表紙　墨書書き入れあり

（版心記）倭板四書　山崎嘉点

（後表紙書き入れ・墨書）井上須磨／井上須江吉

（１９）新版訂正　孟子　道春点　四冊　４９－５２

江戸時代正徳元年（一七一一）板　縦２６・０糎×横１９・３　袋綴装　青表紙　墨書書き入れあり「沖屋蔵本」印あり

（版心記）辻氏版

（刊記）正徳元辛卯年六月良辰／京三条通中嶋／辻勘十郎開版

（２０）新版訂正論語　道春点　四冊　４５－４８

江戸時代中期板　袋綴装　縦２５・６糎×横１９・５　袋綴装　青表紙　墨書・朱書書き入れあり「沖屋蔵本」朱印あり

（巻末・書き入れ）焼山富永／道春点／節次郎（二冊目）

（後表紙見返し・書き入れ）焼山沖屋蔵（一冊目）

（巻末・書き入れ）焼山村沖屋（三冊目）

（後表紙見返し・墨書）春太郎

（２１）古文真宝前集　五冊　１０３－１０７

江戸時代元禄一〇年（一六九七）板　袋綴装　縦２７・５×横１９・１　朱書書き入れあり「焼山沖屋　押込」印あり

（後表紙・書き入れ）押込村　奥氏

（刊記）元禄十丁丑孟春日／平安書肆／武村三郎兵衛／武村新兵衛　重梓

（２２）箋註　蒙求　三冊　１７０－１７１

江戸時代中期板　袋綴装　縦８・０×横６・０　墨書・朱書書き入れあり「沖屋蔵本」印あり

（後表紙見返し・墨書）沖屋蔵本（一冊目）

（後表紙見返し・墨書）富永志津男（三冊目）

（後表紙・墨書）焼山村　富永静雄（三冊目）

（刊記）天和二壬戌之歳三月日　潭龍　角屋清左衛門／北村青堂

（２３）四書大全　十三冊　１１３－１２５

江戸時代中期板　袋綴装　縦２７・７×横１９・６　墨書書き入れあり「沖屋　焼山」印あり

〈安芸郡熊野村海城家文書[9]（文献群番号　１９８８０８）

（24）論語　後藤点　二冊（36－1）
明治板　袋綴装　縦24・2×横17・7　茶表紙　墨書
書き入れなし
（25）改正音訓　礼記　一冊（39）
明治板　袋綴装　縦26・3×横19・5　茶表紙　墨書
書き入れなし

〈安芸国広島城下京橋町　保田（義郎）家文書〉[10]（文献群番号
199808）
（26）孟子集註　四冊（403－28～31）
江戸時代中期板　袋綴装　縦28・0×横18・9　青表
紙　墨書書き入れなし
（27）易経　一冊（403　32）
江戸時代中期板　袋綴装　縦27・0×横18・0　黒表
紙　墨書書き入れなし
（28）大学章句　一冊（403　33）
江戸時代中期板　袋綴装　縦26・5×横18・4　青表
紙　墨書書き入れなし
（29）中庸章句　一冊（403　34）
江戸時代中期板　袋綴装　縦26・0×横18・5　青表
紙　墨書書き入れなし
（30）古文孝経　正文（403　9）
江戸時代延享元年（一七四四）板　袋綴装　縦26・7×
横17・0　茶表紙　墨書書き入れあり
（刊記）延享元甲子夏五月日／須原屋小林新兵衛　梓
（31）春秋左氏伝　十二冊（403　16～27）
江戸時代宝暦五（一七五五）板　袋綴装　縦27・0×横
18・0　青表紙　墨書書き入れあり
（刊記）江戸時代宝暦五乙亥歳正月之吉
京師書林　三条街堀川東へ入町／中江久四　梓
（版心記）那波師曽句読

〈安芸郡海田　千葉家文書〉[11]（文献群番号　198812）
（32）小学　内篇　外篇　二冊（219・15）
江戸時代天明三年（一七八三）板　袋綴装　縦29・5×
横19・0　茶表紙　墨書書き入れあり
（版心記）山崎嘉点
（跋文）寛文十庚戌年
正月中旬
川崎治郎右衛門板行
（刊記）天明三癸卯季秋
京師書林／風月荘左衛門／横江岩之助／大久保
伝蔵／武村嘉兵衛
（33）中庸章句　一冊（219・10）

江戸時代中期板　袋綴装　縦27・5×横19・5　茶表紙　墨書書き入れなし

（版心記）倭板四書　山崎嘉点

（34）中庸章句　一冊（219・14）

江戸時代中期板　袋綴装　縦26・0×横18・5　茶表紙　墨書書き入れなし

（版心記）山崎嘉点

（35）詩経　釈義音注律（律　呂）二冊（219・8）

江戸時代中期板　袋綴装　縦25・7×横18・0　青表紙　墨書書き入れあり「千葉」印あり

（版心記）多賀漸点　朱子臨漳定本

（墨書・書き入れ）寿亭　郡用所

（36）近思録　一冊（219）木箱3枠

江戸時代安永三年（一七七四）板　袋綴装　縦25・7×横18・0　青表紙　墨書書き入れあり

（版心記）多賀漸点　朱子臨漳定本「千葉」印あり

（刊記）安永三甲午年五月再板／寿文堂／井上清兵衛

【二〇一五年度調査より】

（37）礼記　四冊

江戸時代寛政元（一七八九）年板　袋綴装　縦25・5×横18・5　青表紙　墨書書き入れあり

（版心記）多賀漸点　朱子臨漳定本

（刊記）寛政紀元己酉秋九月吉辰

書肆　東武　日本橋南一町目／須原屋茂兵衛

浪速　心斎橋筋順慶町北江入／柏原屋清右衛門

京都　寺町通二条下ル町／勝村九右衛門／堀川通高辻上ル／梶川七郎兵衛

（38）孟子集註　四冊

江戸時代後期　板　袋綴装　縦27・7×横19・0　茶表紙　墨書書き入れなし

（版心記）倭板四書　山崎嘉点

（刊記）大阪　村上勘右衛門／武村市兵衛／同姓佐兵衛

（39）易経　釈義音注　二冊

江戸時代後期　板　袋綴装　縦25・5×横18・0　青表紙　墨書書き入れなし

（版心記）朱子臨漳定本　多賀漸点

（40）大学章句　一冊

江戸時代中期板　袋綴装　縦27・5×横19・0　茶表紙　墨書書き入れなし

（版心記）倭板四書　山崎嘉点

（41）書経　釈義音注　一冊　内藤初音

江戸時代中期板　袋綴装　縦26・0×横18・0　青表紙　墨書書き入れなし
（版心記）朱子臨漳定本
（42）孟子集註　三冊
江戸時代明和五（一七六八）年板　袋綴装　縦26・0×横18・5　茶表紙　墨書書き入れなし
（版心記）倭板四書
（刊記）明和五年戊子年五月再板
（43）春秋　釈義音注　一冊
江戸時代寛政元（一七八九）年板　袋綴装　縦26・0×横18・5　茶表紙　墨書書き入れなし
（44）孟子集註　梁恵王　一冊
江戸時代中期板　袋綴装　縦25・5×横18・0　茶表紙　墨書書き入れなし
（版心記）倭板四書　山崎嘉点
（後表紙見返し・墨書）海田市　東　神保姓
（45）書経　釈義音注上　一冊
江戸時代後期板　袋綴装　縦25・8×横18・0　青表紙　墨書書き入れなし
（版心記）朱子臨定本　多賀漸点

〈豊田郡乃美村児玉家文書(12)〉

（46）小学　三冊　201202　31-1～3
江戸時代寛文十（一六七〇）年板　袋綴装　縦27・0×横19・0　青表紙　墨書・朱書書き入れあり
（表紙見返し・墨書）朋友
乃美村　佐ヱ里
富田屋
西教寺本也
（後表紙・墨書書き入れ）豊田郡
（刊記）寛文十庚戌年
正月中旬
川崎治郎右衛門板行
（47）論語　一冊（巻八　朱熹集註）201202　99
江戸時代中期板　袋綴装　縦26・5×横19・0　青表紙　墨書書き入れあり
（版心記）廣文堂蔵
（48）論語古訓　二冊　201202　96-1～2
江戸時代元文四（一七三九）年板　袋綴装　縦27・0×横17・0　白表紙　墨書・朱書書き入れあり
（49）小学句読　五冊　201202　112・1～4
江戸時代安政二（一八五五）年板　袋綴装　縦横　黒表紙　墨書書き入れあり
（版心記）有文閣蔵

（刊記）四冊　有文閣蔵版
寛政七年乙卯孟夏穀旦
安政二乙卯年孟春再刻
浪速書林　柳原喜兵衛
前川源七郎　合梓

（50）小学句読　一冊　201202　112・5
江戸時代享保十九（一七三四）年板　袋綴装　縦25・8横18・2　青表紙　墨書書き入れあり
（刊記）享保十九甲寅三月吉旦求板
浪速　文熙堂寺田與右衛門
（表紙・墨書）七
（内題）小学巻之六
（尾題）小学巻之六　終

（51）孟子　二冊（巻七～巻十）　201202　272・1～2
江戸時代中期板　袋綴装　縦27・5横19・0　白表紙
墨書・朱書書き入れあり
（版心記）倭板四書　孟子集註　山崎嘉点
（表紙見返し・墨書）乃美邑　児玉氏　左江里
養素館蔵　乃美　左加保里本
壬　文化九年　乃美村　左エ里本
（刊記）大坂　村上勘右衛門／武村市兵衛／同姓　佐兵衛

（52）孟子　一冊　201202　275
江戸時代初期板　袋綴装　縦26・0横18・0　青表紙
墨書・白書書き入れあり
（後表紙見返し・墨書）乃美村　小嶋定太良　小嶋氏徳三　之

（53）礼記　一冊　201202　256
江戸時代中期板　袋綴装　縦27・0横19・0　墨書書き入れあり
（表紙・墨書）安昌訓点
（表紙見返し・墨書）児玉氏　乃美左エ利本
（後表紙見返し・墨書）乃美村　養素館蔵書　児玉彌内
覚　共十　末九月十二日　彌内
たんこも　たまはる
文化八年　御写　養素館

（54）孟子　一冊（巻三～巻四）　201202　259
江戸時代中期板　袋綴装　縦27・0横19・0　白表紙
墨書・朱書書き入れあり「児玉」印あり
（版心記）首書四書集註
（表紙・墨書）児玉蔵書ノ十三
（表紙見返し・墨書）児玉氏　説治書
（後表紙見返し・墨書）蓮教寺　児玉氏　児玉有李　春
乃美村

（55）新板校正孟子　道春点　一冊（巻一～巻二）　201

202　260
江戸時代初期板　袋綴装　縦27・0横18・5　青表紙
墨書・朱書・白書書き入れあり「播磨屋　乃美」あり
（後表紙見返し・墨書）乃美村　播磨屋　定太良
（56）孟子　一冊　201202　262
江戸時代中期板　袋綴装　縦25・5横18・5　茶表紙
墨書・朱書書き入れあり
（内題）孟子巻之一
（尾題）孟子巻之二
（表紙見返し・墨書）巳　寿永弐年
酉　五月　揃之
牛尾英吉書物
乃美村
井野屋潮英吉本
（後表紙）乃美邑　牛尾氏
（57）新版校正　孟子　道春点　四　一冊　201202
269
江戸時代後期板　袋綴装　縦27・0横18・5　青表紙
墨書・朱書書き入れあり
（内題）孟子巻之十一
（尾題）孟子巻之十四
（版心記）森氏版
（巻末・墨書）寛而
（後表紙見返し・墨書）乃美村
有り野や留吉
（58）大全　大学　完　一冊　201202　169
江戸時代中期板　袋綴装　縦24・5横18・5　青表紙
墨書書き入れなし
（巻頭・墨書）嘉永癸丑八月六日野人持来価四文目
中庸大全乾坤大学一巻已上求之
児玉大輔蔵
（後表紙見返し・墨書）大学大全一冊中庸大全　二冊
以上　三巻
右二部書嘉永六癸丑「七甲寅ヲ
末梢」八月六日清
武村野人持来価四銭目買之

二　角筆の書き入れから読み解く安芸・備後地方の音韻的諸事象

(1) 開合について

開合の区別については、室町時代に乱れ始めたといわれるが、開音から合音への変化は短期間では進まなかった。室町時代の後期のキリシタン文献では、「〈」「〉」により、開合は区別され

ている。それ以降、近世を中心に開音が合音へと転じたが、地域によってその進行はまちまちであって、明治時代以降も、開合が区別された地域もある。このように、開音から合音への変化が、地域ごとにどのように進んだかということについては、必ずしも明らかになっていない。ただ、開合の変化の経緯については、墨で書かれた文献や印刷された文献では明らかにすることが難しい。墨の文献では、日本語の規範にとらわれやすいため、合音で発音されていたとしても、開音で表記されるということは起こりうるからである。

さて、今回の調査で見出された角筆文献を精査すると、開合に関して次に示すように、「開音を開音にした例」「開音を合音にした例」「合音を開音にした例」「合音を合音にした例」が見られる。これら四つのパターンの中では。「合音を合音にした例」が最も多く、次いで「開音を合音にした例」が多く、次いで「開音を開音した例」の順に数が少なくなる。「合音を開音にした例」は一例認められただけである。このような状況を見ると、開音の合音化が進んでいると一応は言えるが、開音を保った例も存することから、いまだなお、開音という従来の発音を留めたいという意識もうかがわれ、全体として開合は混乱した状況を呈している。合音をあえて開音にした例が存するのも、開音を留めようとする意識の表れであると見ることもできよう。

○開合に関する具体例

【合音を開音にした例】

1　鴻「カウ」（22[13]　蒙求　第1冊1丁表9行目）

2　菱「リヤウ」（1　文選旁訓大全　2丁表10行目）

1の例は、「鴻」の音「コウ」を、開音「カウ」にした例である。2は、「菱」の音「リヨウ」を「リヤウ」と開音にした例である。

【開音を合音にした例】

3　陽「ヨウ」（20　論語　第4冊　17丁表3行目）

4　娘「ロウ」（21　古文真宝前集　第9冊　28丁表1行目）

5　嬢妻子「ジヨウ」（21　古文真宝前集　第9冊　10丁裏8行目）

6　鵲巣「シヤクソウ」（35　詩経　第1冊　3丁10行欄外）

7　誕イニ（「王」イニ）（10　書経　第1冊　19丁裏4行目）

3の例は、「陽」の音「ヤウ」を「ヨウ」と合音にした例である。4は、「娘」の音「ラウ」を合音「ロウ」にした例で、5は、

「嬢」の音「ヂヤウ」を「ジョウ」と合音にした例である。6は「巣」の音「サウ」を「ソウ」と合音にした例である。

和語の類音字表記にも、合音を開音にしたと思われる例がある。7の例は、「誕」の訓の「オホイニ」が長音化したものを、類音字「王」（ワウ）を使って、「オウイニ」と読ませていたことを示す例であろう。「王」の音は「ワウ」であり、それを合音の「オウ」の表記に使っている。

【開音を開音にした例】

8　痒序「ヤウヂヨ」（26　孟子　第1冊　12丁表4行目）

9　耆老「ギラウ」（26　孟子　第1冊　47丁裏2行目）

10　匠「シヤウ」（26　孟子　第3冊　33丁裏3行目）

11　巌牆「ガンシヤウ」（26　孟子　第4冊　45丁表6行目）

12　牛羊「ギウヤウ」（28　大学章句　第1冊23丁表5行目）

13　藻「サウ」（35　詩経　第1冊　3丁表9行目）

8の例は、「痒」の音「ヤウ」を開音の「ヤウ」にした例である。9の例は、「老」の音「ラウ」を開音の「ラウ」にした例である。10の例は、「匠」の音「シヤウ」を開音の「シヤウ」にした例である。11の例は、「牆」の音「シヤウ」を開音の「シヤウ」にした例である。12の例は、「羊」の音「ヤウ」を開音の「ヤウ」にした例である。13の例は、「藻」の音「サウ」を開音の「サウ」にした例である。

文献番号35の「詩経」のうちでも、開音を開音にした例（用例番号13）と、開音を合音にした例（用例番号6）が混在する。1・2の例のように、合音を開音にした例が見られるが、ほとんどは、開音を合音にした例である。これは、開音の存在を認めながら、それを保とうとし、一方では開音を合音に発音する意識が存し、開音を開音、開音を合音、合音を開音、合音を合音という状況が混在しているのであろう。

【合音を合音にした例】

14　瑤琨「ヨウ」（10　書経　第1冊　12丁裏5行目）

15　一毛「モウ」（17　孟子　巻4　47丁表8行目）

16　毫釐「ゴウリ」（17　孟子　巻4　47丁表8行目）

17　好著「コウ」（32　小学　第1冊　2丁裏8行目）

合音を合音のままで表記した例は、先に示したほかにも多数存するが、ここではそれを示すことを省略する。

(2) サ（ザ）行ウ列開拗音「シユ」を直音「シ」とする例

「首尾（しゅび）」を「しび」と発音するなどの記述が、「かたこと」[14]に見られ、このような発音の変化が、江戸初期の上方で生じていたことが知られる。文書館の角筆文献にも、安芸地方において近世後期にはこのような発音の変化が生じていたことを示す例が存する。

18　祝「シク」（13　論語　第3冊38丁表8行目）
19　飧粥「カンジク」（17　孟子　巻五　3丁裏4行目）

右の例18は、「祝」の音「シユク」を「シク」とした例である。19は、「粥」「シユク」を「ジク」とした例である。

ただし、次に示すように、ザ行ウ列開拗音「ジユ」をそのまま記した例もあり、サ（ザ）行ウ列開拗音「シユ」を直音「シ」と発音する現象は、個々の語ごとに生じた変化であったと考えられる。

20　儒術「ジウジユツ」（22　蒙求　第1冊1丁表4行目）

(3) 長音の短呼

長音を短呼する例についても、江戸初期の上方で、「飲まふ」を「のも」と発音されていたことが、「かたこと」によって知られる。文書館の角筆文献にも、安芸地方において近世後期にはこのような発音の変化が生じていたことを示す例が存する。

21　覆テ「ヲイ」テ（13　論語　第4冊23丁表2行目）
22　謳歌「ヲガ」〈上欄外〉「ヲカ」右傍（26　孟子　巻3　56丁表2行目）
23　筐「キヨ」（35　詩経　第1冊3丁裏10行目欄外）

右の例21は、『覆テ』の訓「ヲ、イテ」の長音化した「ヲーイテ」を短呼して、「ヲイテ」とした例であろう。角筆の「ヲ」と「イ」は連続して書かれており、「ヲ」と「イ」の間に、踊り字の「、」は書かれていない。例22は、『謳歌』の音「ヲウカ」の「ヲウ」を短呼し、「ヲカ」とした例である。上欄外の角筆によれば、「ヲガ」とあり、連濁している。例23は、「筐」の音「キヨウ」を「キヨ」と短音にした例である。

(4) 合拗音の直音表記

合拗音「クワ」「グワ」を「カ」「ガ」と発音することについては、「浮世風呂」[15]に、江戸の女性が「くわんおん」を「かんのん」に発音したことを示す記述があり、合拗音を直音に発音する現象が、江戸後期の江戸で生じていたことが分かる。文書館

の角筆文献にも、安芸地方において近世後期にはこのような発音の変化が生じていたことを示す例が存する。

24　歓「かん」（19　孟子　第1冊9丁表2行目）
25　郊関「コウカン」（26　孟子　第1冊　30丁裏8行目）
26　戈兵「カヘイ」（27　易経　第1冊　説卦79丁表8行目）
27　還シ「カン」（32　小学　外篇　第1冊4丁表3行目）
28　過失「カシツ」（32　小学　外篇　第1冊4丁表4行目）

24の例は、「歓」の音「クワン」を、直音の「カン」にした例である。25の例は、「関」の音「クワン」を直音の「カン」にした例である。26の例は、「戈」の音「クワ」を直音の「カ」にした例である。27の例は、「還」の音「クワン」を、直音の「カン」にした例である。28の例は、「過」の音「クワ」を、直音の「カ」にした例である。ただし、以下に示すように、本来の合拗音を保っている例も散見される。ただし、本来の直音を合拗音にした例は見られない。

【合拗音を保った例】

29　怪「クハイ」（21　古文真宝前集　第8冊　26丁表6行目）
30　鰥「カン」（上欄外）「クハン」（漢字の右傍）（26　孟子　第1冊　36丁表4行目）

29の例は、「怪」の音「クワイ」を、同じく合拗音「クワイ」にした例である。30の例は、「鰥」の音「クワン」に対して、「クハン」の合拗音と「カン」の直音とが付された例である。「クハン」は「鰥」の右傍にやや小さく鋭い凹みで書かれた角筆で、「カン」は、上欄外に大きく、浅い凹みで書かれており、両者は別筆である。「クハン」「カン」が書き入れられた時代差は分からないが、恐らくは、浅い凹みで書かれた角筆は近世後期から、明治時代初期に書き入れられたものであろう。今回発見された文書館の角筆を含め、今までに調査してきた角筆文献では、再刻後藤点のような近世後期から明治時代版の文献に書き入れられた角筆は、まるで針の先で書かれたように細い線で、欄外や空白部分に大きく書かれる。これに対して、江戸初期から中期にかけて刷られた文献に書き入れられた角筆は、比較的小さな文字で、凹みが深く、漢字の右傍、左傍に書かれる傾向にある。上欄外に書かれることもあるが、その際は該当する漢字がある行の上にしっかりと書かれる。このことから、「クハ

ン」は、26の孟子が刷られて間もないころの書き入れで、上欄外の「カン」は「クハン」よりも後に書き入れられたものであると推測される。29の「クハイ」も、凹みが深く、小さめの文字であることから、21古文真宝前集が刷られた元禄時代の間もないころの書き入れであろうと思われる。このようにみると、合拗音を保った例は、江戸時代中期を下らない書き入れであることになり、安芸地方においてはその後、合拗音の直音化が進んだということになろう。

また、次に示すように、直音「カ」は、「カ」のままであり、直音を拗音にした例はない。

31　簡編「カンヘン」(22　蒙求　第1冊　3丁表2行目)
32　嘉楽「カラク」(34　中庸　一冊　18丁表　18丁表1行目)

(5) 四つ仮名

ダ行のヂ・ヅとザ行のジ・ズの混同については、室町末から起こり始めたと言われ、近世から明治時代にかけて、ゆるやかにジ・ズの方に変化したと考えられる。明治時代発行の『音韻調査報告書』[16]をみると、広島県での報告では、明治時代には四つ仮名の区別はされていないとみてよい。問題は、近世のいつ、どのような変化を遂げて、明治時代のこのような状況に至ったかということであるが、このことについては、未だ明らかにされていないと言わざるを得ない。

文書館の角筆文献を見ると、字音語においても、和語においても、ダ行をザ行にした例が見られる。文献15は、明治時代版であるから、角筆も明治以降ということになる。残念ながら、その他の文献の、角筆の書き入れ時期については不明である。いずれも、江戸時代中期に印刷された文献であり、遅くとも江戸時代中期には、四つ仮名の乱れが安芸地方で生じていたことになろう。

33　嬢妻子「ジヨウ」(21　古文真宝前集　巻9　10丁裏8行目)
34　軸「ジク」(21　古文真宝前集　巻9　22丁表7行目)
35　爾「ナンジ」(28　大学章句　第1冊　19丁表4行目)
36　爾「ナンジ」(28　大学章句　第1冊　19丁表6行目)
37　煩「ワズライ」(31　春秋左氏伝　巻二十　7丁表1行目)

33の例は、「嬢」の音「ヂヤウ」をザ行の「ジヤウ」にした

例である。34の例は、「軸」の音「ヂク」を、ザ行の「ジク」にした例である。35、36の例は、「ナンヂ」を「ナンジ」にした例である。37の例は、「煩」の訓「ワヅライ」を「ワズライ」にした例である。

また、次の例のように、ザ行をダ行にした例もある。これらの例は、四つ仮名の発音が、混乱していることを示すものであろう。

38　痒序「ヤウヂヨ」（26　孟子　第1冊　12丁表4行目）
39　充虞「ヂウグ」（26　孟子　第3冊　33丁裏2行目）

38の例は、「序」の音「ジヨ」を、「ヂヨ」と表した例である。39は、「充」の音「ジユウ」を「ヂウ」とした例である。四つ仮名の発音は、ダ行からザ行に変化するが、これらはザ行をダ行にした例である。これらの例が、単に四つ仮名の乱れを示したものか、発音をそのまま示したものか定かではないが、口頭語を反映しやすいという角筆の性質からすれば、発音を反映した可能性もある。ザ行からダ行になるという例は、地域によっては存した可能性もある。なお、このようにザ行であるところをダ行にした例は、安芸地方の他の角筆文献に多く見出だされる。四つ仮名の発音がザ行に完全に移行しているのであれば、表記上このような乱れはないと考えられるので、少なくとも、ダ行からザ行への発音の変化が完全には移行していない段階を示していると考えられよう。ただし、角筆が書き入れられた時期については不明である。筆者は、江戸時代後期ら明治時代初期の書入れであろうと推測している。

(6) 長音化

次に示す例は、短音が長音化した例である。このような長音化の例も、広島県下のみならず、中国地方、九州地方の角筆文献に認められる。

40　儒術「ジウジユツ」（22　蒙求　第1冊1丁表4行目）
41　姑女「コウ」（27　易経　第1冊　下19表6行目）

40の例は、「儒」の音「ジユ」を「ジウ」と長音化させた例である。なお、「ジウ」は、「ジユウ」と同音であったと考えられる。41の例は、「姑」の音「コ」を「コウ」とした例である。

(7) 促音の脱落

次の例は、「謁」の音「エツシ」の促音が脱落して、「エシ」となった例である。このような例は、広島県下から見つかった

角筆文献だけではなく、中国地方、九州地方の角筆文献に認められる。

42　謁シ「エシ」（7　小学校本　外篇　58丁表1行目）

まとめ

以上、このたび、文書館で授業として行われている角筆調査をもとに、二〇一三年度から二〇一五年度までの調査状況を報告した。

角筆文献には、墨で書かれた文献には見出し難い、近世の安芸地方の音韻の特徴を示す多数の事例を見出すことができる。ただし、今回は発見できた資料による制約もあり、備後地方の音韻的特徴については言及することができなかった。今後の発見に期待したい。また、角筆が書き入れられた年代については、なお不明とせざるを得ない。墨で書かれた文献についても、その書入れを特定することは難しいが、角筆はそれ以上に特定に困難を伴う。この角筆の難点をどのように補うかということが、今後の角筆研究の大きな課題と言えよう。多くの角筆文献を調査し、それらの情報を照合することが、年代を特定する一つの方法であろうと考えている。

今後も引き続き、文書館所蔵の江戸時代板本を中心に、各家の文書ごとに角筆調査を続けていく。なお、二〇一六年、二〇一七年度の調査結果は、別稿にて報告する。

注

（1）広島県立文書館は、広島情報プラザ内（広島市中区千田町）にあり、広島県に関係する行政文書や古文書に関する様々な業務を行っている。

（2）角筆文献とは、写本や版本などに、角筆によって文字や絵などが書き込まれている文献を言う。角筆とは、墨を使わず、凹み線によって文字や絵を書く筆記具である。角筆文献は、昭和36年に小林芳規博士によって発見され、以来、小林博士を中心に研究がされてきた。

（3）二〇一三年の調査概要については、「広島県立文書館だより」№39（広島県立文書館発行２０１５年3月発行）を参照していただきたい。

（4）広島女学院大学で開講している講義科目。大学2年生から4年生が選択科目として受講する。

（5）桑原家文書は、広島藩浅野家藩士桑原家に伝来した文書で、平成5年に文書館に寄贈された。『安芸国広島浅野家家中桑原家文書仮目録』（広島県立文書館　平成23年7月）の西村晃氏の記述によれば、桑原文書は、戦後、桑原家から親戚に渡り、文書館に寄贈されている。桑原家文書に書き入れられた角筆が、具体的に誰の手によって書き入れられたのかについては判然としないが、桑原家文書が角筆が書き入れられた時代に桑原家の元にあったといえるであろう。したがって、桑原文書の角筆の書き入れから分かる日本語の情報は、近世後期から明治初期にかけての安芸方言の特徴を示すと考えてよい。また、西村晃氏の記述によれば、「桑原氏は広島藩水主方の藩士。「村上家乗」の作者村上勇蔵の妻の実家に当たる。幕

末期の吉郎二（徳明）は藩の神伝主馬流水術の師範を勤めたことがある。吉郎二の子俊太（喜徹）は電信技士であった。」とされる。吉郎二の名前は、角筆文献の墨書に散見される。

（6）『備後国芦田郡府中市村延藤家文書仮目録』（広島県立文書館　平成22年3月）西向宏介氏の記述によると、延藤家文書は、「備後国芦田郡府中市村の商家延藤家に伝来した商家文書」である。延藤家は代々、備後国芦田郡府中市村（現在府中市）にあって、商家として、金融業、問屋業、酒造業などで財を成した。今回見つかった角筆文献には、墨書による人名等は書き入れが無いため、どの時代の誰による所有であり、誰により角筆が書き入れられたかについては、不明である。おそらく、江戸時代後期から明治時代初期にかけて、延藤家に関わる人物によって書き入れられたと考えられる。

（7）広島県立文書館作成『安芸国賀茂郡寺家村野坂家文書　目録』によれば、野坂家文書は、昭和63年9月20日付けで所蔵者の野坂謙二氏から寄託された文書群であるとされる。『鶴亭日記』の著者である野坂完山は、その19代目にあたる。完山は医療活動、社会事業はもとより、文芸活動や教育活動（私塾「恭塾」を開設）においても活躍した人物である。残念ながら、今回、見つかった角筆文献は、完山ゆかりの書とは認定できない。いずれも江戸時代後期（天保九年の刊記のある資料を含む）の文献であり、完山存命中には刊行されていたが、「明治五年壬申孟春求之」といった墨書のある文献も含んでおり、恐らくは、多くは明治初期に購入された文献群であろう。

（8）広島県立文書館作成「広島県安芸郡焼山冨永家文書　仮目録」によれば、富永家文書は、昭和60年（１９８５）7月17日、原蔵者から広島県立図書館へ寄贈され、その後、広島県立文書館に移管された文献群である。仮目録の記述によれば、「文書から判明する歴代当主は、明和頃が忠左衛門、享和頃が万兵衛、天保頃から雄介通恭（明治18年（１８８５）死去）、弘化年間から才一郎通範（明治15年ごろまで）（中略）、明治15年頃から静雄（大正4年頃まで）」とある。発見された角筆文献には、富永静雄と墨書された文献（文献番号２２）が存する。

（9）広島県立文書館作成「安芸国安芸郡熊野村海城家文書　目録」によれば、海城家文書は、「昭和30年代に所蔵者の海城他人雄氏から広島県立図書館に寄託され、整理・利用されていたが、昭和63年10月に県立図書館が広島市中区上幟町から現在の広島県情報プラザ（広島市中区千田町三丁目）内へ移転し、同プラザ内に広島県立文書館が開館するに当り、同年8月18日海城他人雄氏の実子に当たる石田静子氏から県立文書館に寄贈されたものである。」とある。今回発見された角筆文献には、墨書による書き入れは無く、誰の所在によるものかは定かではない。

（10）保田家文書は、「広島市保田家　仮目録」（西村晃氏　執筆　２０１３年8月）によれば、「広島市京橋町の豪商、保田家（縄屋分家「新宅」）に伝来した文書。」とある。また、「広島城下新町組稲荷町西組・京橋町年寄、広島第百四十六国立銀行頭取、廣島銀行頭取など」を勤めた家であるともされる。収蔵までの経緯も、「平成８年（１９９６）5月22日、原蔵者から代理人を通じて寄贈。原蔵者は保田家の資料を保管していたが、廣島銀行『創業百年史』編纂に当たり、同行へ貸与した。編纂終了後、原蔵者の所在が不明となったため、返却されないまま廣島銀行で保管され、平成3年（１９９１）11月、廣島銀行「創業百年史」編纂資料（１９９０１９）の一部として、他の資料とともに当館へ寄託された。」とある。これによれば、原蔵者について、詳しいことは分からないが、保田家から広島銀行において保管されていたのを、そのまま広島県立文書簡に収蔵された由である。したがって、本文書の角筆もまた、広島市京橋の保田家において書き入れられたとみてよかろう。

（11）広島県立文書館作成「安芸国安芸郡海田市千葉家文書　目録」によれば、「千葉家文書全６２１点は、所蔵者の株式会社千葉物流倉

庫（広島市南区宇品海岸）社長、千葉諭吉氏のご厚意により当文書館に寄託された文書群である。」とされる。残念ながら、今回見出された角筆文献には、屋号を示す「海田市　東　神保姓」の墨書が文献番号44に見られるほかは、文献の由緒が分かるような墨書は見出されなかった。

(12) 広島県立文書館職員西村晃氏からのご教示に依れば、児玉家は医師で、なかでも児島謙二蘭斎（大正四年十月廿六日没）は、『広島県人名事典　芸備先哲伝』（玉井源作著　昭和51年　歴史図書社）にその名が記される。蘭斎の祖父の「児玉大輔」の名が文献番号58の墨書に見える。

(13) 数字は、角筆文献一覧に掲載した角筆文献番号を示す。

(14) 安原貞室著、寛文頃成立。

(15) 式亭三馬著、文化六年から十年に成立。

(16) 国語調査委員会編、明治38年刊。

〔付記〕

広島県立文書館での角筆文献調査に際し、同館研究員の方々には多大なるご厚情と便宜を賜った。また、本稿の作成に関わり特に西村晃氏に多くのご教示とご助言を賜った。記して深謝申し上げる。

About the Early Modern Dialect in AKI (安芸・Hirosima) by Kakuhitu (角筆) Literatures

—— The Material Survey in Hiroshima Prefectural Archives (2014–2016) ——

Yasushi YUNOKI

Abstract

This paper is the report about the discovering Kukufitu (角筆), (2014–2015). Mainly I examined about the early modern dialect in AKI (安芸・Hirosima), Especially on phonology. The 58 Kakuhitu (角筆) references were discovered. I found out the disorder of kaigou (開合)・yotugana (四つ仮名) in the Kakuhitu (角筆) references.

Keywords: 角筆，安芸方言，開合，四つ仮名